

2023 年 8 月 29 日

## 2023 年度 第 8 回 Jリーグ理事会後会見発言録

2023 年 8 月 29 日(火)17:30～

Jリーグ会議室および Web ミーティングシステムにて実施

登壇： 野々村 芳和 チェアマン  
窪田 慎二 執行役員  
樋口 順也 フットボール本部 本部長  
陪席： 青影 宜典 執行役員  
司会： 仲村 健太郎 広報部長

### 〔司会(仲村広報部長)より説明〕

本日開催いたしました第 8 回理事会後の会見を開催いたします。

冒頭私の方から一点お話させていただきます。

ダイヤモンド・サッカーの実況でご活躍された金子勝彦さんがご逝去されたとの訃報を受けました。本日 Jリーグからもお悔やみのコメントを出させていただきましたが、海外のサッカー、そして日本サッカー・Jリーグについて多くの発信をいただいたことに感謝申し上げます。2002 年には永年の功績を称え「功労賞」を授与させていただいています。

生前のご功績に Jリーグとして改めて感謝の意をお伝えしたいと思います。

本日理事会での決議事項での公表事項はございません。

検討事項としてシーズン移行の検討状況についてご説明いたします。

また、令和 5 年度のスポーツコミッションシンポジウムにつきましては、Jリーグコーポレートサイトに後援名義として掲載していますのでご確認ください。

<https://aboutj.league.jp/corporate/aboutj/supportingevents/>

それではシーズン移行の検討状況につきまして、フットボール本部長の樋口よりご説明いたします。

### 〔樋口フットボール本部本部長より「シーズン移行検討の件」について説明〕

先週の実行委員会と本日の理事会でシーズン移行に関する検討の議題を扱っています。

4 分科会が一旦終わり、議論の軸として「シーズン移行するかどうか」よりも、そもそも「Jリーグ・日本サッカーはどのようなものを目指していくか」という議論に時間を使っていますので、資料のタイトルもそういう形に変更しています。

分科会や本日の議論とは別に、「監督会議」の報告資料もお配りしています。8 月に 4 回に分けてそれぞれ 1 時間ずつ全クラブの監督がご参加いただけるようオンラインでの会議を実施いたしまし

た。結果的にご都合が合わなかった方もいるのですが、60クラブ中57クラブの監督にご参加いただいています。これまでもクラブごとに監督へのインプットはあったと思いますが、各回1時間と限られた中、冒頭15分程で私や窪田からご説明し、その後45分ほど各監督と意見交換やコメントをいただく形となりました。監督会議での前提条件といたしまして、クラブの経営面なども含めた「クラブとして」のご意見ではなく、あくまでもフットボールの価値を高めるための「監督個人として」のご意見をいただいています。

クラブ名や氏名の記載なしでご意見を公開しています。(各発言は)取りまとめて公開した方が良いかと思いつつも、取りまとめることで情報が歪むこともあるかと思い、長いのですが全ての発言を記載しました。33名より発言をいただいています。やはり夏のクオリティが下がっていることに危機感を持っているということ、またヨーロッパとウインドーを合わせることで移籍に関するメリットがあるのではないかというご意見を多数いただいています。

一方で、シーズン移行をした場合の現状の日程案をご覧ください、ウィンターブレイクがこれだけ長いよりは、サッカーできる時間を長くとったほうが良く、シーズン移行しないほうが良いのではないかというご意見もいくつかいただきました。

#### 1. 『Jリーグ・日本サッカーが目指すもの』\*議論中

### Jリーグ・日本サッカーの現状認識

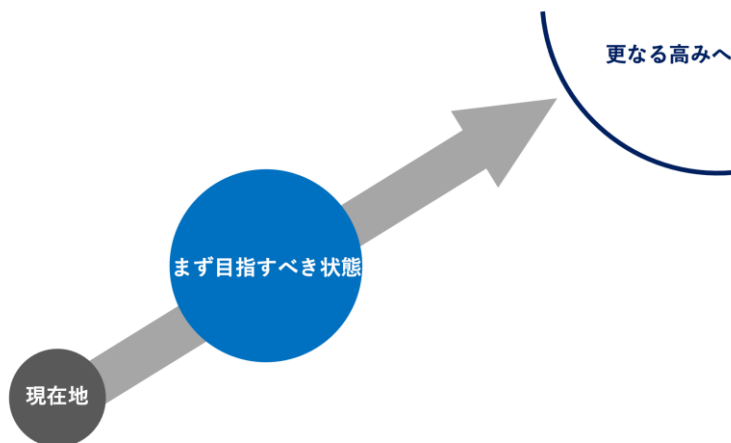
- “まず目指すべき状態”は「アジアで圧倒的なリーグ」になることや、「欧州リーグ選手とJリーグ選手による日本代表W杯ベスト8以上」になること。そこに到達した上で、“更なる高み”を目指していく。
- Jリーグは開幕から30年が経った。当時は英プレミアリーグと同程度の経営規模であったがそこから欧州トップリーグは大きな成長を遂げている。Jリーグも30年の歴史を土台に、「競争」の段階へ向かいたい。現時点のトップ層のクラブからは「閉塞感がある」という声も上がっており、世界と戦っていくための環境構築が必要と考える
- ACLの大会構造変更やクラブW杯の拡大によって「アジアで勝つこと」「世界と戦うこと」はJリーグ全体の成長テーマである「トップ層がナショナル(グローバル)コンテンツとして輝く」を実現していく上で重要となる

4

「FIFA ワールドカップで優勝したい、その際にJリーグの選手が多くいる」という究極の目標はありつつ、ここ数年でまず目指すべき状態として、アジアで圧倒的なJリーグになることや、ワールドカップベスト8以上を目指しますが、やはりヨーロッパのUEFAチャンピオンズリーグや5大リーグで戦っている選手がいながら、そこにJリーグの選手も組み合わせっていくことが現実的かと思っています。2点目は30年たった中でJリーグとしても一定の成功をおさめつつあると認識していますが、一方でヨーロッパはより長い歴史を土台により大きな成長を遂げているという観点がございませう。そして環境の変化としましてAFCチャンピオンズリーグ(ACL)の大会構造の変化やFIFAクラブワールドカッ

プが 32 クラブ制になることも含め、アジアで勝ち世界で戦うということが、Jリーグとしてもナショナルコンテンツ、グローバルコンテンツのクラブを作り、価値を高めることにより、60 クラブの成長にも寄与していくという観点のお話をしている状況です。

1. 『Jリーグ・日本サッカーが目指すもの』 \* 議論中



5

こちらがイメージ図です。Jリーグ選手中心の日本代表がワールドカップで優勝する、イングランドのプレミアリーグを超える世界 No1 のリーグになる等、さらなる高みはありつつも、まずここ数年で目指すべき状態をしっかりと目指していこうと話をしています。

1. 『Jリーグ・日本サッカーが目指すもの』 \* 議論中

<b>Jリーグ理念</b> 一、日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進 一、豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への 一、国際社会における交流及び観音への貢献		<b>Jリーグ百年構想</b> あなたの町に、緑の芝生におおわれた広場やスポーツ施設をつくること。 サッカーに限らず、あなたがやりたい競技を楽しめるスポーツクラブをつくること。 「観る」「する」「参加する」。スポーツを通して世代を超えた触れ合いの輪を広げること。			
<b>トップ層が、 ナショナル（グローバル） コンテンツとして輝く</b>		<b>60クラブが、 それぞれの地域で輝く</b>			
<b>世界と戦う フットボール</b>	<b>海外からの 収益獲得</b>	<b>競争環境の 構築</b>	<b>各地域での 圧倒的な露出</b>		
<b>最適なシーズンの選択</b> ●選手・スタッフ観点 ●ファン・サポーター観点 ●各種ステークホルダー観点 ●クラブ経営観点 検討中	<b>各種制度の見直し</b> ●ABC制度の撤廃検討 ●移籍金獲得のための 施策検討 ●外国籍枠・HG制など 各種登録枠の検討 ●育成/若手強化策の検討 検討中	<b>配分金ルールの変更</b> ●J1比率の向上 ●新・理念強化配分金の 導入 ●放映権料の機会/懸念の 確認 2023から推進中	<b>大会構造の改革</b> ●全リーグ20クラブ化 ●地域の起爆剤としての ルヴァンカップ改革 2024から開始	<b>マーケティングの強化</b> ●デジタル&テレビでの 露出拡大 ●ローカル&セントラル を使い分けた施策 2023から推進中 ●快適な観戦環境の整備 シーズン検討と合わせて検討	<b>クラブサポートの新設</b> ●リーグ職員のクラブ 担当制の導入 ●露出をフックにした 収益拡大策の推進 2023から推進中

こちらは今までもお見せしたものです。Jリーグ理念やJリーグ百年構想は変わらず、さらに昨年設定した成長戦略の2つのテーマ、【トップ層が、ナショナル（グローバル）コンテンツとして輝く】、【60クラブが、それぞれの地域で輝く】を土台にしながら、そのためにどのような打ち手が必要かということ

を、4つの戦略と6つの施策に整理したものになります。今回この4つの戦略についてより具体的に話をしました。

## 1. 『Jリーグ・日本サッカーが目指すもの』\*議論中

### W杯（日本代表）

- Jリーグ選手の割合は低下傾向。
- 今後も、欧州CLや5大リーグで活躍する選手が多く構成されていくと想定。
- その中で、Jリーグでも”世界と戦える環境”をつくり、Jリーグ選手も多く輩出していきたい。

世界と戦う  
フットボール

### ACL

- 2024-25から大会改革（24クラブ制 / 外国籍枠撤廃 / 優勝賞金 約17億円）。
- クラブW杯へ日本クラブが出場するために、少なくとも4年に1回の優勝は必達。

### クラブW杯

- 32クラブが参加する大会へ（2025年から / 4年に1回）。
- 世界のトップクラブと本気の戦いができる絶好の機会（欧州から12クラブが参加）。

7

まず一つ目【世界と戦うフットボール】については、様々なデータをお示しさせていただきながら意見交換をしています。日本代表はワールドカップに連続出場して、ベスト16に継続して進出できる状況になっていますが、一方でJリーグの選手、国内組の割合は低下傾向にあります。今後もやはりヨーロッパの欧州CLや5大リーグで活躍する選手が中心となることを想定しています。一方で、Jリーグの中においても世界と戦える環境づくりをしっかりと構築しながら、Jリーグの選手もより多く輩出していきたいという思いもあります。

ACLは、今年からシーズン移行し、来年から24クラブの大会に変わります。先日報道発表もございましたが、賞金も3倍になり優勝すると約17億円規模の賞金を獲得する大会になります。さらにこのACLで優勝しなければクラブワールドカップに出場することができません。そのクラブワールドカップは4年に1回32クラブの大会で初回が2025年にアメリカで開催されることが決定しています。

先日来日したマンチェスター・シティのようなクラブが、ヨーロッパからも12クラブ出る大会になるので、こういったクラブと本気場でJクラブが戦うことは、Jリーグとしても絶好の機会と考えています。

## 1. 『Jリーグ・日本サッカーが目指すもの』\*議論中

### 世界のクラブ収益

- トップ20クラブ：平均 630億円規模
- 21～40位クラブ：平均 230億円規模
- 41～60位クラブ：平均 130億円規模

海外からの  
収益獲得

### Jのトップクラブ

- アジアで勝ち、世界と戦うために、収益も一定規模に到達することが重要。
- 「ACLやクラブW杯での賞金獲得」  
「移籍金収益の増加」  
「ナショナル（グローバル）コンテンツとなるクラブが登場することによる放映権料の増加」  
によって、いまの閉塞感を打破したい。

8

【海外からの収益獲得】の面では、ヨーロッパや南米なども含めた世界のクラブの収益の一覧を内部ではお見せしています。概要だけお伝えしますが、トップが約 1,000 億円規模、トップ 20 の平均が約 630 億円、21～40 位までが約 230 億円、41～60 位までが約 130 億円の規模になっています。これらは移籍金が入ったデータではないので、移籍金の収益が加わるともっとプラスになるクラブもあると思います。

例えば 21～40 位では、アヤックス・アムステルダムや SL ベンフィカ、SSC ナポリ、41 位～60 位では、セルティック FC、フェネルバフチェ SK というようなクラブが入ってくるイメージです。

試合結果は収益だけで決まるものではありませんが、今後Jリーグのトップクラブがアジアで勝ち世界と戦っていくためにも、やはり一定規模の収益に届くことで、トップのクラブに勝つチャンスもより増えてくると考えています。

Jリーグは現在、トップでも 100 億円に届かない状態です。

例えば UEFA チャンピオンズリーグでは、ビジャレアル CF、FC ポルト、SL ベンフィカのような 200 億円規模のクラブが、ベスト 8 に毎年 1 クラブくらい入っていますので、200 億円というのを一つの目安として、我々も日本代表のワールドカップと同様にクラブワールドカップでも Jクラブがベスト 8 以上に入るような環境を作れないかと意見交換をしています。

当然そこには多くのギャップがあり、これまでもトップクラブの方々も 100 億円というのは一つの目処にしながらも、「200 億円はどういう世界観なのか」という話になりました。

やはりそのためには今の延長線上の成長ではなく、非連続な成長が必要になります。ACL で優勝すると 20 億円、クラブワールドカップは大会方式も賞金も未発表ですがより多くの金額が入ることが見込まれますので、このような大会で勝っていくこと。そして二桁億円規模の移籍金収益を恒常的に得ていくこと、それから国内放映権、海外放映権両方において、ナショナルコンテンツやグローバ

ルコンテンツとなるクラブが登場することにより、放映権料は上がっていくという道筋が見えていますので、こういった3点で非連続な成長を遂げる必要があることを確認しています。

#### 1. 『Jリーグ・日本サッカーが目指すもの』 \* 議論中

##### 構造改革

- 世界と比較した中でまだ短い歴史やコロナ禍の影響なかなか「競争」へ舵を切ることができていなかった。
- 2022年「適切な競争環境」の構築のために、
  - ・ カテゴリーごとの配分金比率を欧州に近づける変更。
  - ・ 適切なステップで成長ができるよう、各リーグのクラブ数の変更や、新理念強化配分金を導入。
  - ・ J1クラブはその分、新ルヴァンカップなどで、下位カテゴリーへの価値還元も同時に行う。

競争環境の  
構築

##### クラブごとの施策

- 全クラブがそれぞれの形で1.2倍→1.5倍→・・・と成長を目指す。
- そのためのフックとして、まずテレビ等での露出量を圧倒的に増やす施策を実施。
- その露出を軸に、クラブごとのスタイルでファン増加・収益増加を目指していく。

各地域での  
圧倒的な露出

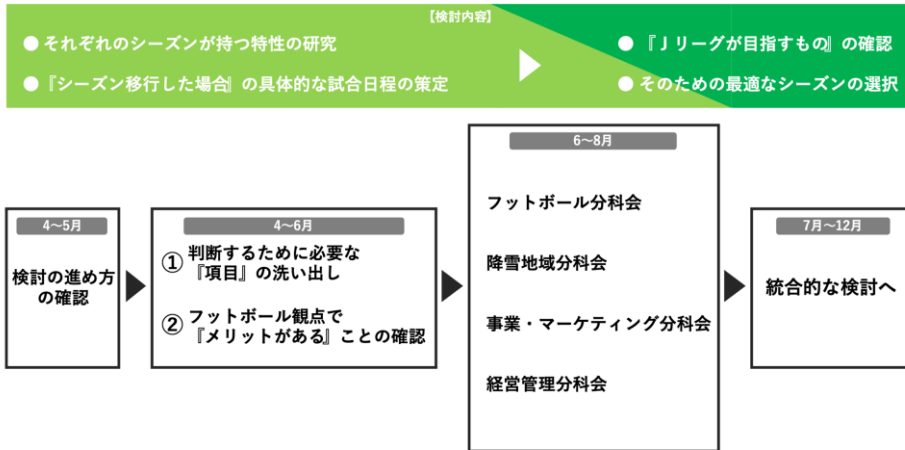
3点目の【競争環境の構築】や4点目の【各地域での圧倒的な露出】は、本日の議論というよりも昨年から続けているものの延長線になります。ですので詳細の説明は割愛しますが、競争へ舵をきっていくということ、J1のクラブ数を20クラブにしたり、Jリーグ YBC ルヴァンカップはトップクラブが下位クラブのホームに行くことで、その地域の起爆剤となるような大会にするなど、複合的な構造改革をしています。

露出についても普段ご説明している通り、今、テレビも含めて露出を圧倒的に増やしている段階です。今後は露出を増やしてファンを増やすだけでなく、そこからどのように収益化していくかも含め、リーグからも職員を各クラブに派遣し、各クラブ担当がクラブとコミュニケーションしながら、それぞれのクラブの収益化のスタイルを作り始めているところです。

ここまでの全体をまとめますと、Jリーグ理念やJリーグ百年構想をベースにしながら、2つの成長テーマを両立させられると考えています。4つの戦略を具現化しながら2つのテーマ、「トップは100億円、200億円と伸びていく」、「60クラブはそれぞれの地域で経営規模を1.2倍、1.5倍と増やしていく」、また、トップが増えることによって様々な賞金や移籍金、放映権が高まるとそれがJリーグ全体の価値向上や配分金増に繋がっていく、そんな構造を作っていけたらという話をしています。

その中の一つの打ち手として、シーズンを移行すべきかどうかということも当然並行して議論しているところです。検討スケジュールについては従前のご説明の通りなので割愛いたします。

## 5. 『シーズン移行』に関する現在の検討状況



\* 移行する場合の最速のタイミングを2026-27シーズンと仮置き  
 \* 2026-27から移行する場合、移行期は下記の2案  
 ・ 2025シーズンの終了後、2026年の前半を0.5シーズンとする  
 ・ 2025年から2026年の前半を統合し、1.5シーズンとする

## 5. 『シーズン移行』に関する現在の検討状況

フットボール分科会	事業・マーケティング分科会
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 試合日程シミュレーションの確認</li> <li>● フットボール水準のデータに関する意見交換</li> <li>● 移行する場合の「移行期の大会方式」の初期整理</li> <li>● JFL/地域リーグ/大学/高校への影響の初期整理</li> <li>● スタジアム確保への影響も重要論点であることの確認</li> <li>● 「シーズンオフ・ウィンターブレイクの過ごし方」の整理を開始</li> <li>● フットボール水準のデータを追加（海外・遠戦）</li> <li>● Jリーグのシーズン中の海外移籍状況の確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 試合日程シミュレーションを基に入場者数シミュレーションを開始</li> <li>● 移行する場合のマーケティング計画の初期整理</li> <li>● 各種ステークホルダーに関連する検討事項の確認</li> <li>● マーケティング担当のグループ討議を実施</li> <li>● 事業担当のグループ討議を実施</li> <li>● <u>試合日程作成・発表に関する工程の確認</u></li> <li>● <u>入場者数シミュレーションのアップデート</u></li> <li>● <u>ステークホルダーとのコミュニケーションに関する相談</u></li> </ul>
降雪地域分科会	経営管理分科会
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 降雪地域の施設関連における情報共有</li> <li>● 試合日程シミュレーションの確認</li> <li>● 12月・2-3月のホーム開催 NG期間の確認</li> <li>● 遠方でキャンプを行いながら試合をする期間の確認</li> <li>● 追加発生するキャンプ負担の確認</li> <li>● 基礎的な気象データの共有</li> <li>● <u>降雪地域の施設関連における情報のアップデート</u></li> <li>● <u>「シーズンオフ・ウィンターブレイクの過ごし方」の進捗報告</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 移行期（0.5 or 1.5）の検討事項の確認</li> <li>● 決算期の検討事項の確認</li> <li>● 税務の検討事項の確認</li> <li>● クラブライセンスの検討事項の確認</li> <li>● P/Lへの影響の検討事項の確認</li> <li>● 資金繰りへの影響の検討事項の確認</li> <li>● <u>P/Lへの影響のアップデート</u></li> </ul>

8月で4つの分科会の各3回が終わり、12回の分科会が終わりました。各分科会の主な議論の内容についてはこちらです。前回お示した2回目までの議論内容に加えて、3回目に追加したものは資料中に下線で示しています。

それぞれの分科会については、検討すべき内容がすべて完了しているというよりは、当初設定している3回がいったん終わったという状態です。8月実行委員会、理事会で詳細の報告をしています。今後、Jリーグの目指す姿、シーズン移行をすることのメリット、デメリット、現在のシーズンのままでいることのメリット、デメリットを具体化しながら議論を進めていきます。

分科会については、これまでと違ったテーマ、例えばスタジアムの確保の調整のための分科会、目指す姿やJリーグの価値をどのように作ってさらにそれをどう具体化していくかといった意見交換をする分科会をつくろうかという話をしています。

いったん、シーズン移行をする場合、しない場合の様々な研究を分科会で行了ましたので、それらの概略をご紹介します。

* 現段階での各種シミュレーションを元にした情報となります。	シーズン移行しない場合	シーズン移行する場合	
		案A	案B
<b>試合開催期間</b> * リーク開幕からリーグ開幕までの期間。 最も長くリーグ戦を行うJ1のケースを記載	通常年：290日程度（8年に5回） W杯年など：250日程度（8年に3回） * 2月3週頃開幕～12月1週頃に閉幕	250日程度 * 8月1週頃に開幕～5月最終週頃に閉幕 * 12月3週頃～2月1週頃はウィンターブレイク	230日程度 * 8月1週頃に開幕～5月最終週頃に閉幕 * 12月1週頃～2月3週頃はウィンターブレイク
<b>シーズンオフ間</b> * リーク開幕から翌シーズンのリーグ開幕までの期間。 最も長くリーグ戦を行うJ1のケースを記載。	12週程度	10週程度	
<b>シーズン中のブレイク期間</b> * W杯年などの影響は「J1のみ」。	通常年：なし W杯年など：6～9週程度 * 通常年は、まず基準案として「なし」で作成。	8週程度	11週程度
<b>平日開催</b> * リーク戦の数。	J1：通常年：1節程度 / W杯年など：4～7節程度 J2：0節程度 J3：1節程度	J1：4節程度 J2：3節程度 J3：3節程度	J1：7節程度 J2：6節程度 J3：6節程度
<b>選手のオフ日数</b>	J1・J2：平均33.6日 J3：平均36.3日 * 2022シーズンの前のオフ日数の実績 * W杯年などの「サマーブレイク」は含まれていない	J1・J2・J3：平均35.7日 ・シーズン前9.2日 ・ウィンターブレイク26.4日 * 各クラブに現時点の想定を申告いただいたもの	J1・J2・J3：平均45.5日 ・シーズン前9.2日 ・ウィンターブレイク26.3日 * 各クラブに現時点の想定を申告いただいたもの
<b>キャンプなどの準備日数</b>	J1・J2：平均39.4日 J3：平均54.4日 * 2022シーズンの前の準備日数の実績	J1・J2・J3：平均78.6日 ・シーズン前1.3日 ・ウィンターブレイク27.2日 * 各クラブに現時点の想定を申告いただいたもの	J1・J2・J3：平均84.1日 ・シーズン前1.3日 ・ウィンターブレイク27.7日 * 各クラブに現時点の想定を申告いただいたもの
<b>降雪地域のアウェイ連続</b>	J1・J2：最大4連続のアウェイ (2月3～3月2週頃)  J3：最大6連続のアウェイ (2月3～3月3週頃)  * J3の開幕は2023シーズンは12月1週であったが、現在、開幕をJ1・J2と合わせることも検討中であり、アウェイ連続が長くなるケースを想定して記載。	J1・J2： ・最大3連続+4連続のアウェイ (12月2～3週頃・2月2～3月1週頃)  ・最大2連続+5連続のアウェイ (12月2～3週頃・2月2～3月2週頃)  J3： ・最大2連続+7連続のアウェイ (12月2～3週頃・2月2～3月3週頃)	J1・J2： ・最大4連続のアウェイ (2月3～3月2週頃)  J3： ・最大6連続のアウェイ (2月3～3月3週頃)  * J3のウィンターブレイクからの再開翌月3週ではなく、3月1週とする「案B2」も検討中。その場合は最大連続のアウェイとなる。
<b>キャンプ費用</b>	「2022シーズン前の実績」と右欄で比較	・ オフ期間キャンプ：+平均1,370万円 ・ 試合開催期間における遠方拠点でのキャンプ：+平均41万円	・ オフ期間キャンプ：+平均1,504万円 ・ 試合開催期間における遠方拠点でのキャンプ：+平均10万円 <span style="float:right">25</span>

実際、クラブや理事会へは、経営状況なども含めてもう少し細かい粒感でご報告しています。

開催期間、ウィンターブレイク、サマーブレイクがどのくらいあり、平日の試合開催がリーグ戦の中でどのくらいあり、選手のオフ期間がどのくらい日数になるのか、アウェイの連続がどれくらい増えるか。キャンプの費用がこれまでの実績と比べてどのくらい増えるのか、各クラブの申告に基づくもので第一次案として作って整理をしてご報告しています。

また、重要な参考情報として、これまで走行に関するインテンシティなどのJリーグのデータをお見せしていました。前々回のご説明の際に、ヨーロッパの5大リーグについてもそうしたデータを確認するとお話ししていましたが、そのデータが入手できましたのでご紹介します。

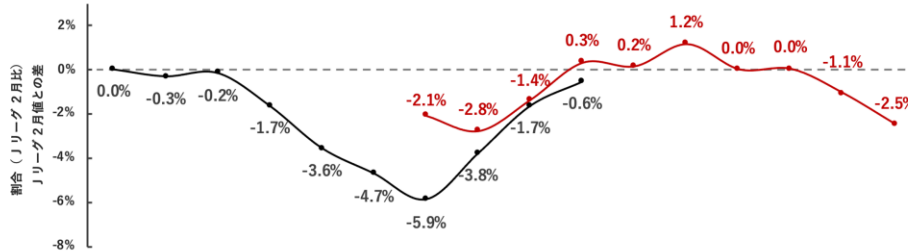
総走行距離、ハイインテンシティ走行距離、加速の回数、減速の回数の4つで比較しています。



## 欧州との比較：総走行距離

1人あたりの総走行距離 (km)

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
J1リーグ	10.16	10.13	10.14	9.99	9.80	9.68	9.56	9.77	9.99	10.10						
欧州リーグ							9.94	9.87	10.02	10.19	10.17	10.28	10.16	10.16	10.05	9.91



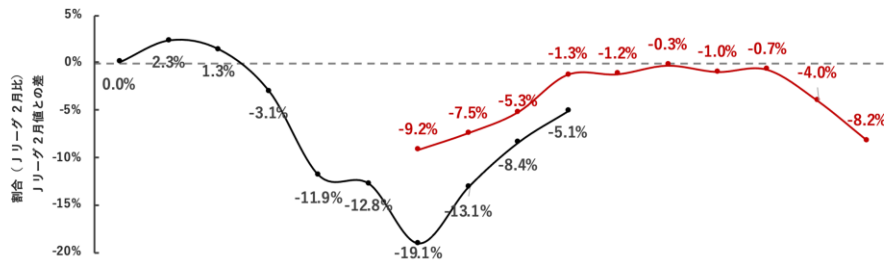
\* 欧州リーグ：2021-22シーズンのデータで、5大リーグの平均値。J1リーグ 2022シーズンのデータ。  
 \* 総走行距離：1試合におけるフィールドプレーヤー各当たりの平均走行距離。対象は各試合において60分以上出場している選手。  
 \* J1リーグのデータは公式データではなく、欧州リーグと同様に外部データの定義で合わせている。

27

## 欧州との比較：ハイインテンシティ走行距離

ハイインテンシティ走行距離 (km)

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
J1リーグ	0.74	0.76	0.75	0.72	0.65	0.64	0.60	0.64	0.68	0.70						
欧州リーグ							0.67	0.68	0.70	0.73	0.73	0.74	0.73	0.73	0.71	0.68



\* 欧州リーグ：2021-22シーズンのデータで、5大リーグの平均値。J1リーグ 2022シーズンのデータ。  
 \* ハイインテンシティ走行距離：1試合におけるフィールドプレーヤー各当たりのハイインテンシティ (20km/h以上) の平均走行距離。対象は各試合において60分以上出場している選手。  
 \* J1リーグのデータは公式データではなく、欧州リーグと同様に外部データの定義で合わせている。

28

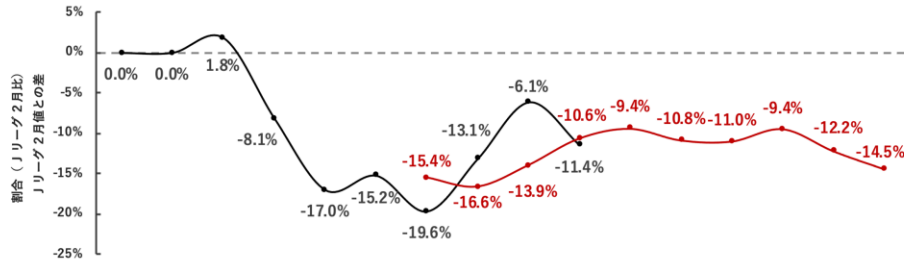
資料のグラフ上、黒がJリーグ、赤がヨーロッパの5大リーグです。それぞれのリーグではばらつきはありますが、グラフのカーブは同じような形となりますので、平均としてまとめています。

なお、Jリーグのデータの数値はこれまでお見せしたものと変わっています。これまでお見せしていたデータは、Jリーグの公式データを活用していました。今回はヨーロッパのデータを外部から購入しており、この外部データとJリーグの公式記録で数値の算出方法の違いがあると比較に意味がなくなりますので、Jリーグのデータも同じ定義の外部データを使用しています。ですので、今回お見せしているものと以前の物とは数字が変わっていますが、

**欧州との比較：加速 (+3.0m/s<sup>2</sup>) の回数**

加速回数

月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
J1リーグ	72.2	72.2	73.5	66.4	60.0	61.3	58.1	62.8	67.8	64.0						
欧州リーグ							61.1	60.2	62.2	64.6	65.4	64.4	64.3	65.4	63.4	61.8

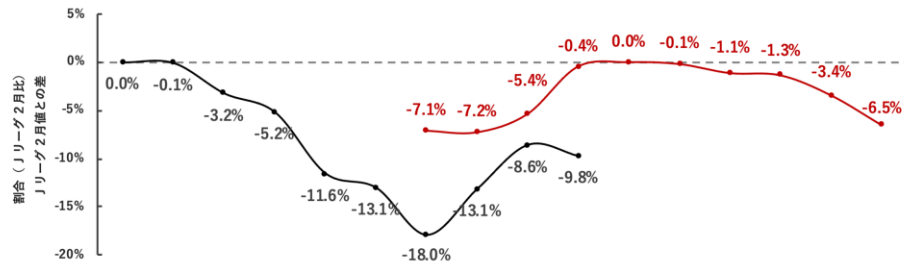


\* 欧州リーグ：2021-22シーズンのデータで、5大リーグの平均値。J1リーグ 2022シーズンのデータ。  
 \* 加速回数：1試合における各クラブのフィールドプレイヤーの加速回数(+3.0m/s<sup>2</sup>以上)の平均回数。対象は各試合において6分以上出場している選手。  
 \* J1リーグのデータは公式データではなく、欧州リーグと同様に外部データの定義で合わせている。

**欧州との比較：減速 (-3.0m/s<sup>2</sup>) の回数**

減速回数

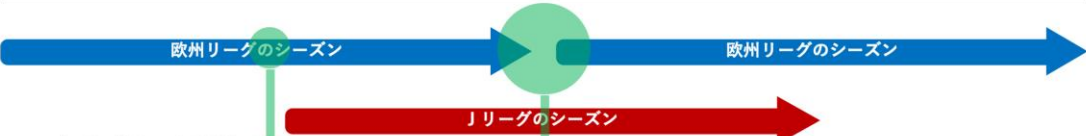
月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
J1リーグ	164.4	164.3	159.1	155.9	145.4	142.9	134.9	142.8	150.3	148.4						
欧州リーグ							152.8	152.5	155.6	163.7	164.5	164.2	162.6	162.2	158.8	153.7



\* 欧州リーグ：2021-22シーズンのデータで、5大リーグの平均値。J1リーグ 2022シーズンのデータ。  
 \* 減速回数：1試合における各クラブのフィールドプレイヤーの減速回数(-3.0m/s<sup>2</sup>以下)の平均回数。対象は各試合において6分以上出場している選手。  
 \* J1リーグのデータは公式データではなく、欧州リーグと同様に外部データの定義で合わせている。

夏に向けた谷型のカーブの形は変わっていませんので、その前提でご覧いただければと思います。グラフは黒と赤で重ねて表記するよりも、季節が違いますので、敢えてずらして表記しています。想像の通りでありましたが、日本は夏に向けて谷(凹)のカーブになっていますが、ヨーロッパは山型(凸)のカーブになっていることがわかります。他のデータも高さのバラツキはありますが、シーズンが始まるとともに上がっていて、終盤に落ちていくという山のカーブがヨーロッパのスタンダードとなっているということが改めて分かりました。

## 海外移籍の状況



■シーズン前（冬）の欧州移籍

2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017
二子健斗	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
上田智博	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
小林 圭	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
植田直樹	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
栗原 陽斗	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
松井 大輔	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
松尾 大祐	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
高橋 直樹	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
三浦 知良	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
堀内 陽斗	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島

■シーズン中（夏）の欧州移籍

2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017
中村 俊輔	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
宇野 重吉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
小川 廉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
宇野 重吉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
宇野 重吉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
宇野 重吉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
宇野 重吉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
宇野 重吉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
宇野 重吉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
宇野 重吉	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島

\* 上記で示している割合は、「移籍前の当該クラブでの出場時間の割合」を示している。  
 ・シーズン前の欧州移籍の場合：直前のシーズンを通しての出場時間の割合  
 ・シーズン中の欧州移籍の場合：当該シーズンの前半部分での出場時間の割合  
 \* 黄色は日本代表（アンダー世代を含む）選手 \* Source: Wyscout data, powered by Hudl

最後に、監督会議のご意見も含めて、やはりJリーグのシーズン中に中心選手が海外移籍することの悪影響について多くの意見をいただいています。こちらの資料は最近の海外移籍をまとめた資料になっています。資料の上部(青い矢印と赤い矢印)がヨーロッパのシーズンとJリーグのシーズンが約半分ずれているということを示しています。

ヨーロッパのシーズンの開始前が世界で一番移籍のマーケットの金額的にも、選手の人数的にも多いです。ヨーロッパのシーズンの変り目が、ちょうどJリーグのシーズンの真ん中になります。ここで多くの有力な選手が海外移籍をしています。当然、有力な選手が抜ければ、チーム編成がシーズンの真ん中に大きく変わりますので、多くの困難に直面するわけですが、そのクラブだけでなく、J2からJ1へ、J3からJ2へと、玉突き的な移籍も発生している影響も含めると、ここに記載されている選手だけでなく、より多くの影響がJリーグシーズンのど真ん中で発生してしまっているのは、一つの大きなデメリットだと認識しています。

本日の議論は以上です。4つの分科会の議論の状況を詳細も含めてご報告し、シーズン移行をする、しないにかかわらず、そもそも、Jリーグ、日本サッカーがどのようなところを目指していくべきか、時間をかけて議論いたしました。

改めて確認ができたのが、トップクラブが100億円、200億円規模になって、ナショナルコンテンツ、グローバルコンテンツになっていくということ。さらに、60クラブがそれぞれの地域でそれぞれのスタイルで経営規模を増やしていく。この2つを両立させていくことが、いま目指す姿に繋がっていくこと

を、実行委委員会、理事会でも確認できたと思っています。

目指す姿は、議論のたたきなのでまだぼやけている部分もありますが、もっとはっきりしたものを示したうえで、そのためにはどちらのシーズンがふさわしいかという意見交換や、もしシーズン移行する場合はJリーグとして各種対策のために活用できる財源がどれくらい準備できるか、降雪地域のクラブや施設にどのくらいサポートができるかを、財源を明確化したうえで各クラブとの意見交換に入っていくのが、9月の予定となっています。

#### 【質疑応答】

Q: Jリーグ、日本サッカーが目指すものというところで、先ほど 200 億円規模を目指すとありましたが、世界のクラブは移籍金が入っていない数字ですが、一方Jリーグは移籍金を含んだ数字で 200 億円を目指すといった理解でよろしいでしょうか。

A: 樋口本部長

データとしては移籍金が入っていないものになりますので、当然、21~40位の平均 230 億円のクラブは 250 億や 260 億といった数字になるクラブもあると思います。いまはまだ 200 億円への数字を正確に積み上げているというよりは、世界観としてそこを目指すという議論の段階です。

Q: 簡単にいうと、今、100 億円のJクラブがない中で、ACL やクラブワールドカップの賞金を考えてもそれなりに、放映権料をどんどん上げていかなければいけないと思います。その点、クラブの努力もですが、Jリーグ側の努力も必要になってくると思いますが、その点はどう捉えていますか。

A: 樋口本部長

当然、放映権料については国内、海外を含めてより高めていく必要があると思っています。放映権料を高めるにはいろいろな要素があると思っていますので、海外の事例で、どのようにして高まっていったのかなどの研究をしています。リーグ、クラブ全体で放映権料を高めるためにコントロールできることと、できないことと両方あると思うのですが、その中でコントロールできることは何かを明確化しながらしっかりと進めていこうという話をしています。当然ながら 1、2 年でいきなり 200 億になるということはないと思います。スタジアムのお客様をもっと増やすこと、パートナーを増やすことなど、様々なことを複合的にやっていく必要があると思います。

Q: 続けて野々村チェアマンに伺いたいのですが、今回の議論では、例えばシーズン移行するとキャンプ費用がだいたい 1 クラブあたり 1,500 万円かかるという試算で 60 クラブ全部に補助すると 9 億円ほどかかります。先ほど樋口さんから 9 月に財源などを明確化して話し合うという説明もありましたが、チェアマンとして移行に伴うクラブへの負担への手当というのは現在、どのように考えていますか。

A: 野々村チェアマン

まず、確かに 60 クラブ×1,500 万円は 9 億円ですが、あくまでもこれはクラブから出てきている数字ということ前置きし、シーズン移行する場合は、私は当初かかるものに関してはリーグ、または日本サッカー界がサポートしながらいい方向に進めていくことが筋だと思っています。かかる費用はそれだけではなく、シーズンを移行することの先に私たちが目指さなければいけないものは、もっと大きなものだと思っていて、それはこれから財源をどうしていくかという点ともリンクしていきます。

まずは降雪地域のスポーツ環境をどう整えていくのか。これは以前から私が言っていますが、日本での 10 年、20 年たってもなかなか変わっていかない中で、サッカー界がそれを進めていくということがかかる費用も当然あると思います。夏場の環境も含めて、日本のスポーツにはどんな環境が必要かを前に進めていかなければならないと思います。費用の捻出の仕方や考え方も含めて、日本サッカー界全体で進めていきたいと思っています。

Q: 樋口さんにお伺いします。Jリーグ監督会議で、57 名の監督に聞いて、掲載されているのは 33 名ですが、どういった取捨選択をしたのか、掲載を拒んだ監督がいたのか、どういった数字なのか教えてください。

A: 樋口本部長

全てのご発言を載せています。4 回に分けて 57 名の監督にご参加いただきましたが、そのうちの 1 回、参加人数の多い回がありまして、すべての監督にご発言いただけない回がありました。会議でのご発言いただいた全 33 名の発言を掲載しています。24 名はご発言いただけていないということです。

Q: 続いてチェアマンにお伺いしたいのですが、日本サッカーが目指すものという中で、アジアで圧倒的なリーグになるというお話がありました。昨今、サウジアラビアがビッグネームをどんどん獲得しています。以前はサッカーバブルがはじけた中国がありましたが、サウジアラビアの場合は国策も絡んでいるとも聞いています。現在のサウジアラビアリーグの動きをどうみられていて、Jリーグとしてどうしていくべきと考えていますか。

A: 野々村チェアマン

例えばサウジアラビアのクラブとJリーグのクラブのどちらが強いのかという話は ACL で一つ見えてくるところだと思います。リーグの価値やその国のサッカーの価値は少し相反するかもしれませんが、強いが弱いかだけではないと思います。Jリーグは 30 年やってきた中で、ほかの国のリーグと比べても良いところはかなりたくさんできていると思いますので、リーグとしての良さがアジアで圧倒的に評価される一つだと思っています。だからといって、競技レベルが低くては意味がないと思いますので、競技レベルを上げていく中でリーグとしての機能、また各クラブのホスピタリティも含め、スタジ

アムの良さや、日本という国の良さといったところを評価の基準の一つとして、アジアの中で、選手があつた国のリーグに行きたいと思ひ、そして見に行きたいというリーグになつていくというニュアンスで捉えていただければと思ひます。

Q: 多分、野々村さんがおっしゃつたJリーグの良さはおそらく子どもも女性も安心して見に行けるといふ観客の視点かと思ひます。昨今、浦和レッズの話はありましたが、Jリーグの良さを改めてご発言いただけますか。

A: 野々村チェアマン

そういうことだと思ひます。例えば海外の方がサッカーを見に行くといふときに、サッカーだけの魅力でくるだけではない。日本はいろいろないいところがあるので、そういうことも含めたのも魅力の一つ。まったく別の視点(選手の視点)でいふと、例えば給料の遅延がないとか、日本という国の安心、安全を海外の選手、子どもがいる選手は求めたりすることもあると思ひます。日本国全体のいいところを表現できるものがサッカーの一つでもあつたりすると思ひます。

Q: 樋口さんに確認したいのですが、走行距離のデータでヨーロッパリーグの基準に合わせたといふ言い方をされていましたが、ソフトを一緒にしたなど、具体的な分析解析ソフト名を教えてください。

A: 樋口本部長

資料内に記載がありますが「SkillCorner」のデータを活用しております。

Q: 今までJリーグが使用していたものは

A: 樋口本部長

Jリーグの公式データです。

Q: これは今回だけ購入して使用したものなのか、今後も「SkillCorner」を活用していくのでしょうか。

A: 樋口本部長

Jリーグの公式データが変わるわけではなく、今回のデータ比較においていっただん活用してみようといふ形で取り組んでいます。

Q: 野々村チェアマンにお伺ひします。先ほどの質問にもサウジアラビアの話が出ていましたが、以前の理事会のメディアブリーフィングの際、アジアサッカー連盟(AFC)における中東勢の発信力、発言力が強くなつていふといふ話をされていふと思ひます。そこに向けた対応、秋春シーズン移行の

話も含め、ナショナル(グローバル)コンテンツとして輝くための強化として、AFC の中での発信力の部分でも意識されているのか、そういった点はいかがでしょうか。

A: 野々村チェアマン

発信力という、どちらかという日本サッカー協会マターの話になると思いますが、やはり日本という国のリーグがアジアの中で、勝ち負けにおける存在感を示すということが一つ発信力を持つ大きな要素だとはしっかりと認識しています。以前お話しした影響力というところでは、サッカーもビジネスとして考えたときには、資金的な部分で相当大きなものが西アジアの方であるというのが現状です。そこは数年間、様子を見ながらということになるでしょうが、国内だけで商売をしていくものではないと思います。現状の世界の情勢を考えたときには、今の流れの中でどうやって世界のサッカーのヒエラルキーの中でJリーグがポジションを取っていくのかということと知恵を絞っていくのだと思っています。

Q: 海外の収益獲得という中で、トップ層が海外からの収益を目安として何割ぐらいというのを意識されているのでしょうか。

A: 樋口本部長

そこまで具体化できていません。海外のクラブの収益をスポンサー収益、入場料などの収益、放映権の収益に分けますと、スポンサーや入場料の収益は 130 億円や 230 億円に達するにはプラス、10 億や 20 億といった世界なのですが、放映権料の配分の部分が非常に大きな差があると思っています。例えば、ヨーロッパチャンピオンズリーグに出場すると、出るだけで 20~30 億円ほどもらえます。先ほどサウジアラビアの話が出ましたが、例えば ACL でサウジアラビアがあれだけ注目されていて、ACL の価値が高まることによって、もしかしたら ACL からの配分金というものがヨーロッパチャンピオンズリーグに近づいてくる世界もあるかもしれません。アジア全体が盛り上がっていくことは、非常に重要な観点だと思っています。

Q: 野々村チェアマンにお伺いしたいのですが、天皇杯での浦和レッズの観客の乱入、先月はFC東京の観客が花火を使用したといったことに対して、理事会の中で何らかの危機感の表明なり、チェアマンが発言する、あるいは議論などはありましたか。

A: 野々村チェアマン

FC東京の話は先月したかと思います。天皇杯の名古屋グランパス vs. 浦和レッズについては、こういうことがありましたということと、JFA でクラブならびに個人に対しての処分をどうするかという話がいまありますという報告はしております。

Q: 私はこの一件は一線を越えたと思っています。花火にしても例えば何かに引火して人が逃げよ

うとすると、浦和レッズの場合も、まだ人がたくさんいるときに上の方に逃げようとする人、下に向かっていこうとする人が合流する、そこで倒れたりすると非常に大事故になります。ヨーロッパなどでも大惨事になる原因は将棋倒しですから。大会自体の主催は協会ですが、実際にはJクラブのサポーター、観客がやっていることなので、チェアマンとしてなのか、リーグとしてなのか、何か今までと違ったアクションが必要なのではないかと思います、いかがでしょうか。

A: 野々村チェアマン

もちろん、皆さんはご存知だと思いますが、Jリーグの試合で起こったことと、JFAの試合、今回の天皇杯で起こったことで、我々が直接介入できることが違ったりします。ただ、私は就任してからずっと、いかにどんないい作品を各クラブが作るかということを競っているのがJリーグの良さでもある中で、作品の一部はサポーターと一緒に作るということは徹底して伝えているつもりです。リーグがそれを一括してこうしなければいけないということを、言えるような規約の設定になっていないのですが、それぞれの地域でそれぞれの作品があっという間としたいと思いますので、各クラブで最も自分たちのクラブがいい作品だと思うものを、サポーターと一緒に作っていくということは、もう一回徹底して考えなければいけないと改めて思いました。浦和レッズの一件の後に、リーグより再度、(各クラブにおける)試合運営管理規定、観戦ルールに基づいて、ルールを守って、皆でいい作品を作っていきましょうということを各クラブに通達をしています。

Q: それは通達済みということですね。

A: 野々村チェアマン

はい。

Q: シーズン移行の件について、分科会がいったん予定通り終わって、現場レベルの意見はある程度吸い上げられたと思いますが、ステークホルダーへの直接的なヒアリング、ファン・サポーターへのヒアリングや説明はどのようにしていくのでしょうか。

A: 野々村チェアマン

ファン・サポーターは、クラブと一緒に作品を作っていく仲間だと各クラブの実行委員も認識していると思います。基本的には、クラブがファン・サポーターと、シーズンの話は向き合いながらコミュニケーションをとっています。クラブからサポーターの意見を吸い上げてもらい、反映すること、また我々(Jリーグ)は、ファン・サポーターの皆さんに対して、メディアの皆さんを通して、今どのような状況でどのような議論を行っているかをお伝えしています。また、私は各地域を回って地元のメディアの皆様とのコミュニケーションを通じて、各地域に住んでいるファン・サポーターに状況をお伝えしていますので、引き続きそれはやっていきたいと思っています。



Q: キャンプ費用について質問です。移行した場合に、案 A、案 B それぞれキャンプ費用が増えるということですが、全 60 クラブが開幕前およびウィンターブ레이크にキャンプに取り組みればそのくらい増えるという理解をしていますが、例えば降雪地域 10 数クラブに限った場合、金額感としてどのくらい増えるのでしょうか。

A: 樋口本部長

現時点でその整理はできていません。クラブもこの試算は大変な作業でして、まだやったことのないことに対して想定で考えてつくっているのが、全 60 クラブ分を集めるのにも時間が掛かりました。まだきちんとした分析ができておらず、速報として平均値をお見せしている状況です。また、クラブによって試算の前提条件が違っていると思いますので、多く見積もっているクラブも少なく見積もっているクラブもあると思います。実際にこの数字を活用していく場合は、どのように精査していくかも大事になります。

Q: 監督会議における監督からのコメントについて質問です。意見のひとつに関する回答で、「サマーブ레이크を来年からは 3~4 週程度設けることを含めて検討している」とのことですが、現時点でどのくらい必要性を感じているのでしょうか。

A: 野々村チェアマン

サマーブ레이크に関してはかなり必要性を感じています。サマーブ레이크をとればとるだけ、他のところで日程がタイトになるということがあるとはいえ、ある程度とった方が良いでしょうと思っています。自分たちは良いものを提供する責任はありますし、Jリーグの理念に掲げられている日本サッカーの水準をどうやって向上させるためには、一言で言うとインテンシティが高くできないようなところでの試合は避けた方が当然良いですし、かつ選手の成長のためにも当然その方が良いです。昨今の日本全体の気温の問題も含めて、このような季節にスポーツはどうあるべきかと考えるきっかけにもJリーグがなっていかなければいけないと思います。

夏、冬のスポーツ環境をどのように作っていくかということにもつながると思いますので、できないと思っていたことを少しでもできるように変えていくことを始めないといけないタイミングにあると思っています。

Q: 状況によって 4 回以降の分科会や、違ったテーマの分科会も設定するとのことですが、全体の議論のリミットの設定、スケジュール感について、最終的な結論が遅れるというようなことはあるのでしょうか。

A: 樋口本部長

現時点ではスケジュールの遅れはないと考えています。今後目指す姿を具体化しながら、「シーズン移行をする、しない」というどちらかの方向を定めたときに、より明確に課題が出てくることがあるか

もしも。その際に何か判断することはあるかもしれませんが、現時点で「これが定まっていないから遅れる」ということは無いと認識しています。

Q: 夏場の環境も含めて、日本のスポーツがどうあるべきか、日本のサッカーがどうあるべきかを JFA と一緒に、育成年代の夏場の試合に関して控えるような方向に持って行きたいなど、具体的にコメントいただければと思います。

A: 野々村チェアマン

JFA も含めてだと思えます。今でも夏場で苦勞しているところがあったりします。それを動かそうと思っても、日本の季節の環境、降雪地域も含めて難しいこともあり、うまく運んではいないと思えますが、今までできなかったことをできるように少しずつでも環境を作っていくということがあれば、だんだん変えていけると思えます。Jリーグだけではなく、JFA も含めて一緒に日本のスポーツ環境を変えろということ、今手を付けないといけない、そのタイミングなのだろうと思えます。

Q: ヴィッセル神戸の齊藤未月選手が 8 月 19 日 第 24 節( vs. 柏レイソル)で大きなけがをして、JFA 審判委員会のブリーフィングで当該プレーは退場(レッドカード)が相当だったのではというお話がありましたが、そうした危険なプレーに対するJリーグとしての注意喚起を考えていることがありますでしょうか。

A: 野々村チェアマン

当然、危険なプレーに関しては、もともとダメだといっています。

今回の件が何にあたるかということは、審判が基準を示すことが大事だと思っています。特にジャッジがこの世界には付きまとうものですが、以前より皆様にもお伝えしている通り、どこの国でも審判は独立したものであり、Jリーグは JFA をお願いして審判を派遣していただいています。とは言えJリーグの提案として、例えば選手は多様な国の選手がJリーグに来てより魅力的なサッカーを提供しようということをやっています(審判も同様のことができないかということ)。

以前は JFA も海外の審判員が 1 年通して日本で笛を吹くということがありましたが、そのような環境を作っていくということは、国内の審判の育成に対しても効果的なのではないかと思っています。もちろん費用はJリーグがしっかりと捻出しながら、色々な国の人が審判を担当して、審判の基準、また観る方の基準も一緒に成長していくという環境を作りたいということを JFA には伝えています。どうすればもっとよくなるか。ジャッジする側も観る側も含めて、日本サッカー全体が成長するために、自分たちとしてはそのような準備があるので、そのような環境を作ってくださいといっています。Jリーグが自分たちで審判員を連れてくるわけにはいかないの、JFA に対してそのようなお願いをしています。

Q: 来月降雪地域についてのサポートについて意見交換をするとのことですが、基本的には練習環

境やキャンプ費用を念頭に置いたものなののでしょうか。それとも、試合環境、スタジアムも視野、考えの中には含まれているものなののでしょうか。

A: 樋口本部長

現時点では、あらゆる施策を検討している段階です。